

龍谷 Ryukoku



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY

アウン・サン・スー・チー氏
名誉博士号授与式 記念講演会
特別号





社会変化のプロセスにおける仏教の役割 — 日本の学生へのメッセージ—

2013年4月15日 アウン・サン・スーチー氏 龍谷大学名誉博士号授与式 記念講演会 深草キャンパス顕真館

我々は常に理想に向かって行動し、不可能に挑戦しなければなりません

まず、名誉博士の学位を戴いたことに、そしてここでお話しさせていただく光栄に、感謝します。

私は、仏教の専門家ではありません。よい仏教徒でありたいと思っています。生涯を通じて仏教を学びたい、まさに今も学びつつあるという段階です。ですから、一仏教徒として、仏教の教えに沿って生活をしているつもりの一人の人間として、お話をしたいと思います。

ビルマにおける社会変革についてはできるだけ短く話し、皆さんからのご質問を受けたいと思います。外にいらっしゃるたくさんの方にもご挨拶をしたいと思います。

といいますのも、これこそがひとつの仏教であると思うのです。仏教というのは、人々のために思うということ。若い方々がたくさん、外で私のことを待ってくださっています。その方々のための時間を残しておきたい。それが私にとって或る意味では講演よりも大事なことなのです。それが私にとっての仏教の実践なのです。

人々を慈しむ、他の人々の気持ちを大切にすることが仏教です。社会経済的な変革をもたらそうとしている私の国では、他人を大切にすることがまず大事で、それがなければ仏教徒とは言えません。なぜなら仏教は慈愛と慈悲の教えに基づくからです。この二つなくして仏教は語れないと思っています。

これこそが、ビルマに変化をもたらす最良の貢献であると考えます。我が国の変化は暴力や怒り、または復讐や、危害を加えたいという思いではなくて、ビルマの人々や世界中の人々に慈愛と慈悲の精神を広げることにあるのです。

ビルマは長年分断されてきた国です。真の平和を長らく味わっていません。独立して以降、怒りや戦いがなくなったことはありません。常にどこかに武装した反乱軍がありました。それに積極的に関わり、戦った人もいます。いまだに暴力で解決を計ろうとする人もいます。これが私たちの国の状況です。これを変えるには、本当の意味での平和と愛を国全体に広めるには、まず、お互いを大切にすることからはじめなければなりません。

ビルマでは、全ての人々が仏教徒ではありません。様々な宗教を信奉する人がいます。こうした人々に等しく敬意を表し、仏教徒に向けるのと同じような慈愛と慈悲を抱くことが大切です。相手が同じ宗派あるか否かで差別をするのであれば、真の仏教の道を歩んでいるということにはなりません。

政治と仏教の繋がりについては、私の本「Freedom from Fear」の「民主主義を求めて」の章を読んでいただければ、はっきりとおわかりになると思います。基本的な要旨は、仏教は決して現代の民主主義の概念に反するものではないということです。その理由は、仏教は多大の価値を一人ひとりの人間においているからで、それはつまり人

間と人権に価値があるということなのです。真に民主化した社会の基本概念は人権の尊重にあります。そこが仏教の教えと共通しています。人権の尊重と、実際の価値は一人ひとりの人間に備わっているものなのです。

慈愛と慈悲は当たり前のことと考えてはいけません。私達に与えられるものは、当然自然に与えられるものなのです。慈愛は他人から買ったり、要求したり、強要したりするものではない私はしばしば指摘してきました。慈愛を要求することさえしてはならないのです。自然に与えられるものでなければなりません。だから自然に受けたいと望むなら、あなたもまた自然に与えなければなりません。新しい民主社会であつてほしいと願う社会のメンバーの間で、仏教徒の価値を最重要視すべきです。

これは理想的にすぎる、不可能だと言われるかもしれませんが、我々は常に理想に向かって行動し、不可能に挑戦しなければなりません。奇跡としか思えないことでも達成するのだという確信を持つに到る精神を養わなければなりません。人間は最悪と同時に最善の可能性も秘めているという確信をもって前進すべきです。

そのために最善の道を行くか、最悪を取るかは選択の問題ですが、当然最善を選択すべきで、それに関しては、私は未来にたっぷり時間のある若い人に期待します。彼らには彼らの信じる価値を育む時間がたっぷりあるからです。

社会の民主的変革の過程で、仏教の役割は何かと尋ねられたら、その主な役割は、仏陀の教えどおり、慈愛と慈悲を実践することにより、我々は、達成したいと思うものを平和的手段により達成できると人々に確信させることだと私は言いたいのです。

狭い心は仏教の教えに反します。私たちは成し遂げたいと願う変化に向かって堂々と歩むべきです。行政、経済、政治の未来に関しては、楽観的かと尋ねられるなら、今日のビルマで起こっていることについては、我々は慎重を期した上で楽観的でなければならぬといつも言っています。しかし一個人として話を求められたり、人間の魂に訴えるメッセージを求められたら、私は楽観的だと答えるでしょう。何故なら我々の誰もが我々の住む社会を変える資質を持っていると私は信じているからです。

大事なものは、深く関わることです。そして、望みどおりの社会変化をもたらすには覚悟が必要です。基本的には仏教の最高の価値を遵守しつつ、希望に沿った政治、社会、経済の変革をビルマにもたらしていきたいと思っています。ありがとうございました。

アウン・サン・スー・チー氏 略歴

1945年生。ミャンマー連邦共和国における非暴力民主化運動の指導者、政治家、連邦議会議員。国民民主連盟中央執行委員会議長。
1991年ノーベル平和賞受賞。

日本やミャンマーの若者と話を

— 龍谷大学への来訪の経緯

アウン・サン・スー・チー氏は、彼女の夫がイギリス研究留学生時代の1975年に、同じく研究留学中だった本学元教授・大津定美氏夫妻と出会って以降、家族ぐるみの交流を続けてきた。長い自宅軟禁の間、会うことはかなわなかったが、2012年、約26年ぶりにスー・チー氏と大津夫妻はミャンマーの自宅で再会。その折に、スー・チー氏に近々来日の意向があることがわかり、このことが大津氏より本学に伝えられた。

大津夫妻との親交がきっかけで、かつてスー・チー氏が研究者として京都に滞在していた頃に本学にもよく訪れてくださっていたこと、スー・チー氏の亡き夫でチベット学者のマイケル・アリス氏が1995年に本学で特別講義を行ったことなど、これまでのいくつかのご縁もふまえ、本学側は、スー・チー氏来日の折に本学来訪を願う赤松学長の親書を大津夫妻に託し、再度ミャンマーを訪問していただいた。スー・チー氏の来訪によって、仏教の非暴力の精神基盤を貫く彼女の姿勢を学生たちに伝える機会となることへの期待があった。そしてスー・チー氏側からも本学訪問希望の表明を得、外務省との手続きを進め、今回の来訪がかなったものである。

来訪に先駆け、本学アフラシア多文化社会研究センターの主催



により、2012年7月に大津夫妻による特別講演会『アウン・サン・スー・チーを語る「ミャンマー民主化の星—アウン・サン・スー・チーと京都—」』を開催。300名以上の市民や学生が参加した。また、2012年11月にも同センターにて『現代ミャンマーの農業発展—イネ・コメからみる管区ビルマと少数民族山地—』などの研究会を開催し、ミャンマーへの関心を高めてきた。

来訪にあたって、スー・チー氏はマスコミの取材に対し「今回の訪問では日本の若い人たちの話を聞くことを特に楽しみにしている」と話したという。学生たちに語りかける時間をとったのも、世界のこれからを担う若者たちこそを大切にしたいという意図があったのではないだろうか。

その姿は、世界平和を望む人々を勇気づけてきた

— 名誉博士号授与

本学は、今回のアウン・サン・スー・チー氏の訪問を機に、同氏に龍谷大学名誉博士号を授与した。長年、ミャンマーの民主化の過程で偉大な役割を果たし、世界平和の構築に取り組んでいる人々を勇気づけた功績などを称えた。本学名誉博士号は、国内外を問わず社会的・文化的に著しく功績のある人に贈られるものであり、これまで5名の方々に贈られてきたが、2003年以来ながらく授与がなかった。

赤松学長コメント:並々ならぬご縁にて、今回本学にアウン・サン・スー・チー氏をお迎えますことは、浄土真宗の精神を建学の精神にかかげ、多文化共生キャンパスを標榜する私達にとつてたいへん名誉なことであり、喜ばしいことです。アウン・サン・スー・チー氏の、不屈の精神でミャンマーの未来に希望を持ち、長年にわたり非暴力による民主化運動の指導者として果たされた偉大な役割、世界平和の構築に取り組んでいる人々を勇気づけた功績は多大です。この度のご来訪を機に、龍谷大学名誉博士の称号を贈呈することとなりました。

私たちは仏教を基軸とした教育研究を推進しています。そのような本学が、仏教が社会的に大きな役割を担うミャンマーとの交流を深めていくことには、たいへん意義があると考えています。今回のご来訪を



契機とし、ミャンマーとの国際交流を促進するため、ミャンマーの未来を担う多くの学生を積極的に受け入れて支援するとともに、学生・研究者を通じた学術交流を促進し、両国の友好関係をさらに深め発展させていくことを、ここに約します。

記念講演後には、学生との意見交換の時間も設けられた。「あなたの生活における仏教の役割は」や「ミャンマーの若者に期待することは」という質問には「私の人生の目的は、世界をより良くしていきたいということ。仏教は常に、そんな私の一部です。若い人は、自分の権利ではなく義務を意識して生きていくべきです。しっかりと勉強し、のちのち国がその成果を恩恵として受けられるよう、頑張ってください」と応えていた。



多文化共生の実現に向けて、ミャンマーとの国際交流を推進

— ミャンマーとの国際交流施策を検討

本学は、長い歴史において、仏教を中心とした教育研究を展開しており、豊富な知的資源を有している。その本学にとって、アウン・サン・スー・チー氏の訪問を契機に、仏教が大きな社会的役割を担うミャンマーとの国際交流を促進し、高等教育研究機関との関係を深めていくことは、大きな意義があると考えられる。また、ミャンマーでは、昨今民主化の動きが加速され、アジア諸国のなかでも大きく発展することが期待されており、今後、日本との文化交流や経済交流が進展するものと推察できる。本学では、グローバル社会に応じた「多文化共生キャンパス」の創出をめざしており、同じアジアに位置するミャンマーを理解し、両国の友好関係を深めることにも大きな意義があると考えられる。これらの意義を具現化するため、本学とミャンマーとの国際交流を促進する諸施策を積極的に展開していく。

《具体的施策》

- ・ミャンマーにおける高等教育研究機関との「学術協定」・「学生交換協定」の締結
- ・ミャンマーからの受入留学生への支援（奨学金含む）
- ・ミャンマーへの「スタディー・ツアー」の企画
- ・その他、ミャンマーとの国際交流を促進するための施策

さらに、本学が近年社会的責務として注力している自然エネルギーの研究開発についても協力する方針を決定し、ミャンマーの農村での小水力発電プロジェクトなどへのバックアップを検討中である。

「彼女は、世界中の自由な若者たちに希望を託したいのです」

— 研究留学生時代から家族ぐるみの親交を続けてきた大津元教授夫妻が語る



今回のスー・チー氏来日の経緯には、同氏と長年親交の厚い大津定美・典子夫妻の存在が大きい。1975年、典子氏は留学中のロンドン大学の研究室で、スー・チー氏の夫であるチベット研究者、マイケル・アリス氏と出会った。マイケルとスー、貧しく清らかなこの研究者夫妻と大津夫妻はすぐに打ち解け、以来時代の激流の中にあっても家族のように温かい親交を重ねて来た。民主化活動の指導者としてのスー・チー氏ではなく、妹のような存在「スー」。その素顔を、久しぶりに再会した喜びと共に語っていただいた。

26年ぶりの再会。スーは何も変わっていなかった

典子氏 2012年1月に私たちはビルマのヤンゴンを訪れ、26年ぶりにスーと再会しました。86年にスーが日本に滞在していた時以来です。87年に彼女はビルマへ帰国し、そして自宅に軟禁されましたが、その後も私たちは毎年のようにイギリスにいるマイケルと2人の息子たちに会いにいきました。何より家族を大切にしているスーが、この離ればなれの生活でどんなに苦しんでいるか。それがわかるだけに少しでも彼女を安心させたい、そんな思いでマイケルが病に倒れ、99年に亡くなった時には、駆けつけられないスーの代わりに、葬儀を最後まで見届けました。4半世紀ぶりに会ったスーは、昔の彼女とちっとも変わってはいませんでした。もちろん私たちの関係もです。今回の京都来訪では、桜見物をしたり錦市場ではしゃいで買い物をしながら、私たちは昔と変わらない雰囲気できちんと話し合い、かつて一緒に歌った歌を大きな声で歌いました。世間から見た政治家としてのアウン・サン・スー・チーではなく、私が知っているのは、妻として、母としてのスー、そして深く深くビルマを愛するスーです。今、彼女のまわりにはその政策の真の意図を理解せずにバッシングする圧力が多く存在しますが、彼女の愛してやまない祖国に、そして世界にスーの純粋な思いが曲がって伝わってしまうことが私には歯がゆくてならない。私は本当のスーの姿を知る者として、彼女の真の生き方や思いを伝えたいのです。

若い人への思いを受けて、私たちは何ができるか

定美氏 私は経済システム論の研究者としてロシアやベトナム、中国など社会主義国が市場経済へと移行する過程をたくさん見てきましたが、昨年訪れたヤンゴンの荒廃し浮浪者に溢れた姿は、絶望的な風景でした。今、ビルマには資源を狙って各国の資本が流入していますが、国民の生活向上とは縁遠い話です。何しろビルマの電化率はわずか18%だ、何か出来ることはないか。そこで思いついたのが小水力発電です。滋賀に手づくりで水車小屋をつくり、捨てられた自転車のハブダイナモを使って日常使うちょっとした電気を発電している方がいるのですが、そのアイデアをもとに、ビルマの人たちが自力で発電できる仕組みを伝えられないかと、現在具体策を模索中です。私がビルマの人たちに教えたいのは、知恵を使えばお金がなくても自分で状況を変えられるということ。長い専政によって、“自分たちには何かができる”という意思すら奪われてしまったビルマの国民の気持ちや、少しでも変えられないかと思っています。龍谷大学の学生たちには、今回のスーとの出会いを通して、社会を変えていくリーダーの在り方というものを国際政治のなかで考えてみてほしいですね。そして今後ビルマとどんな関係をもてるのか、自分のこととして具体的に考えてみてほしい。大掛かりなことじゃなくてもいい、何かに興味を持って具体的なレスポンスしてくれる学生がいいたら嬉しいですね。

典子氏 スーは、今回の講演会で大勢の学生たちが心から歓迎してくれたことが、本当に嬉しかったようです。こんなにも自由な若者がいる、そのこと自体にスーは感激していました。というのもビルマの優秀な若者たちは青春のほとんどを刑務所のなかで過ごしています。政府に反対するピラを配っただけでも20年の禁固刑。そして一度でも投獄された人はその後まともな職業に就くことができません。だからビルマには若い世代がいないのです。スーは国を変えるために声を上げ、矢面に立つところまでやりました。しかし彼女ももう歳です。後を継いで未来のビルマを繋いでゆくのは若者たち。スーは次の世代に、日本を含めた世界中の若者たちに希望を託したいのです。



大津定美（おおつ さだよし）神戸大学名誉教授・元龍谷大学経済学部教授
1938年北海道生まれ、東京外国語大学・京都大学大学院卒。ロシア経済の専門家として、著作『現代ソ連の労働市場』（サントリー学芸賞受賞）、『北東アジアにおける国際労働移動と地域経済開発』等。
大津典子（おおつ のりこ）元龍谷大学非常勤講師
1939年京都生まれ、関西学院大学・京都大学大学院卒。著作『モスクワの女たち』『乳がんは女たちをつなぐ』。昨年出版された『アウンサンスーチーへの手紙』はビルマの雑誌にも連載、近く単行本としてビルマ語版と英語版の出版も予定されている。

広報誌「龍谷」特別号
アウン・サン・スーチー氏
名誉博士号授与式 記念講演会
2013年6月28日発行
編集・制作：龍谷大学学長室（広報）
発行：龍谷大学
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町 67
電話 075-642-1111（代表）

<http://www.ryukoku.ac.jp>

You, Unlimited



龍谷大学
RYUKOKU UNIVERSITY